

北斗病院で看護師研修するインドネシアの5人（左からラシアドさん、イゲデさん、リヤマさん、アストリッドさん、ディアナさん）



夢は日本勤務

インドネシア人の看護師5人

インドネシア人の看護師5人が日本で看護師として働くことを目指し、社会医療法人北斗（帯広市稲田、鎌田一理事長）の北斗病院で研修に励んでいる。日伊両国の経済連携協定で始まった受け入れ事業で来帯、日本の資格を取得すれば研修後に就労できる。5人はインドネシアでの日本語勉強も含め一定の経験を積んで選抜された人材で「日本の高度な医療を勉強しながら頑張りたい」と意気込んでいる。

北斗病院で研修

インドネシアからの看護師候補受入（26）の男性2人、ディアナさん（28）、リヤマさん（31）、アストリッドさん（29）の女性3人が決まった。2年目の今年度は約300人が入国を予定、道内では北斗と札幌市内の医療機関の2カ所が受け入れた。

5人は「看護部長の人柄にもひかれ、北斗を選んだ。看護師の仕事はあまり変わらないが、日本の病院は医療機器が高度。特に北斗は脳神経外科など医療技術が進んでいるとの印象を受ける」「看護師の先輩に教わり早く日本の看護師になって仕事をしたい」と意欲的だ。

北斗では「5人はインドネシアの国立病院に勤めた優秀な看護師。グローバルな視点から人事交流を進め人材養成に貢献したい」と希望。本田つき子看護部長を現地に派遣して面談、ラシアドさん（28）、イゲデさん（28）は「看護部長の先陣に教わり早く日本の看護師になって仕事をしたい」と意欲的だ。病院で外国人を見かけるのは珍しい。

「高度医療を勉強し、頑張る」

いとあって「驚く患者もいるが、優しく接してもらっている。病棟ではたくさんの方が一緒に楽しい雰囲気です。食事をしてるのがインドネシアと違う」とリヤマさん。5人とも半年に及ぶ日本語の勉強で会話も上達しつつあるが「全部聞き取れないこともあり、漢字が難しい。試験は日本語で行われる。早く上手になれるよう家で毎日勉強している」と声をそろえる。

常夏の祖国と違い氷点下20度を下回る十勝について「とても寒く、最初はびっくりした」と戸惑いもあったが「鎌田理事長からダウンジャケットや手袋など防寒着をプレゼントされ、ありがたかった。休日にはイトーヨーカドー（帯広店）に遊びに出かけている」と笑顔。受け入れ事業では最大3年の滞在期間中に資格取得が必要。「頑張って合格し、日本の病院で可能な限り長く働きたい」と話している。

（児玉匡史）